05 分析結果

公的性の減少・私的性の増幅

かつての郷愁空間の濃度は濃く、”土地に対して皆で共有できる空間”が存在していたが、その濃度が年々薄まってきたことから
「郷愁空間が皆と共有できない自分だけのものとなっていること」
他の要素が薄れてきている一方で、「郷愁の構築において感情による影響が強まっていること」を読み取ることができた。

私有性のない会館

また、活動拠点である「萩原会館」に郷愁空間の公的性が強く現れていたが、その拠点であった場所も現在は宅地化され、土地に蓄積した記憶は蓋をされた状態である。
かつての会館は、農村時代の地主さんが、一軒地域に寄与されたもので、誰かの私有性が生まれることなく平等な活気に溢れ、多世代が使用する機会があったことで世代を超えた交流も生まれ地域の象徴的存在となっていた。

私有性のある会館

現在の会館は、住民からの徴収により新設されたものであるが、調査を進める中でその徴収金額も各家庭により異なりが出ていたことがわかった。また、会館の使用権もその金額の差によって決められるものでもなく、昔から住んでいた方が優先的に使用の枠を確保していたようである。
そして、現在の会館には、先住者の限定的な私有性が生まれ、悪い関係を象徴するような存在と化してしまっている。

子供のいない会館

加えて、新規参入者は地域活動への参加が乏しく公的郷愁の生成も行えていない。
また、任意参加である子供会も参加人数が少なくなった事で3年前に姿を消した。
そうして、かつての他世代が交流できるような平等な活気は姿を潜め消めてしまった。

破壊者による愛着の芽生え

最後に、リサーチと実体験から郷愁の形成において破壊者という存在が重要であることがわかった。
私自身、宅地化という私的郷愁の破壊者により土地に対する愛着に気付き今回の制作へと繋がったように、この土地に長く住む方は、宅地化・老朽化・河川整備・県道開通などある事象に対する様々な破壊者により、その都度、郷愁の形成が強まり、土地に対する愛着が強まっていることがわかった。

06 建築提案

仮設と常設

「公的郷愁の象徴であった会館の消滅」
「新規参入者の公的郷愁の不生成」
「破壊者による愛着の芽生え」
という３つの事象から仮設建築と３つの常設建築を用いた以下の提案を行うこととした。

お正月行事「とんど」

今日の郷愁空間の構築に伴う特徴の一つに、「感情」・「回数」の影響の強さがある。
そこで、調査結果より感情と一番関係が強かった「行事」を軸として公的郷愁の生成を図る事とした。
その一つとしてお正月行事の「とんど」がある。とんどが行われるこの日、地域の人々は一堂に会し炎を囲い郷愁の記憶を蓄積させる。そこで今回この行為の中で、公的郷愁の構築を試み、土地に対する愛着にも繋げていくこととした。

07 仮設建築

「火」という破壊者

分析結果にもあるように、破壊者という存在がいることで守りたくな感情からくる愛着が生まれる。建築において「火」という破壊者を確立させることで瞬発的な公的郷愁の生成を図る。

08 常設建築

要素に特化した建築

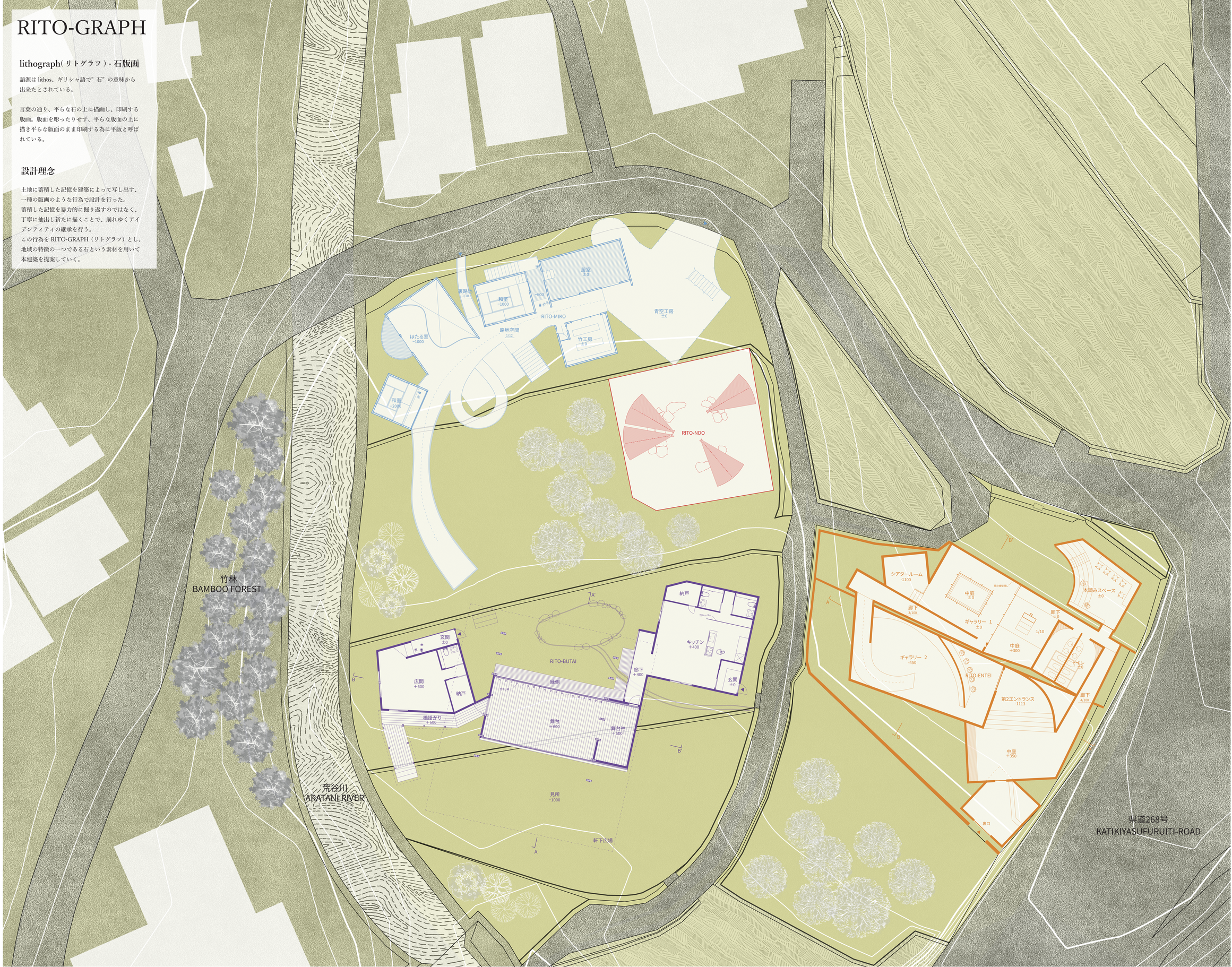
常設建築には、郷愁空間を構成する要素の「回数」・「時間」・「動作」に特化した３つの常設建築を計画し、仮設とは異なる長い時間軸での公的郷愁の生成を図る。
地域の特徴や宅地化によって失った空間など、個人が持つ郷愁空間を建築に写し出し、先住者にとっては記憶を共有できるようにすることで郷愁の規防となる建築群を設計する。

RITO-GRAPH

lithograph（リトグラフ）- 石版画

語源は lithos、ギリシャ語で”石”の意味から出来たとされている。

言葉の通り、平らな石の上に描画し、印刷する版画。版面を彫ったりせず、平らな版面の上に描き平らな版面のまま印刷する為に平版と呼ばれている。

設計理念

土地に蓄積した記憶を建築によって写し出す、一種の版画のような行為で設計を行った。
蓄積した記憶を暴力的に掘り返すのではなく、丁寧に抽出し新たに描くことで、崩れゆくアイデンティティの継承を行う。
この行為を RITO-GRAPH（リトグラフ）とし、地域の特徴の一つである石という素材を用いて本建築を提案していく。